

幕末英語学習書 4 点の依拠資料と著作者

——『英米対話捷徑』『和英商賈対話集』『商用通語』『ゑんざりしことば』

田野村忠温

要旨：幕末の日本で出版された最初期の英語学習書のうち、中浜万次郎訳『英米対話捷徑』、著者不明『和英商賈対話集』、小島雄斎輯『商用通語』、清水卯三郎『ゑんざりしことば』の4点について、それぞれの依拠資料の有無と如何の問題を考察する。状況は学習書ごとに異なり、文例を全面的ないし部分的にオランダの英語学習書から取っているものもあれば、すべて独自に準備したと見られるものもある。語彙については、日本で出版された語彙集を利用しているものもある。併せて、各学習書の著作者の問題にも考察を加える。

キーワード：『英米対話捷徑』『和英商賈対話集』『商用通語』『ゑんざりしことば』

1 はじめに

1859（安政6）年の横浜、函館、長崎開港直後の時期の日本で相次いで出版された英語学習書には、辞書の類と日本語による説明を含まないものを除けば、次のようなものがある。

中浜万次郎訳『英米対話捷徑』（1859（安政6）年）

著者不明『和英商賈対話集』（1859（安政6）年）

小島雄斎輯『商用通語』（1860（安政7）年）

清水卯三郎『ゑんざりしことば』（1860（万延1）年）

福沢諭吉編訳『増訂華英通語』（1860（万延1）年）

このうち福沢諭吉編訳『増訂華英通語』については、それが中国で出版された英語学習書である『華英通語』咸豊5年本（1855（咸豊5）年）によって編まれていること、そして、福沢がそれに対して具体的にどのような“増訂”を施したかということを描論(2018a)で明らかにした。この小論においては、上記の英語学習書のうち『増訂華英通語』より早く出版された4点の依拠資料の有無と如何の問題について考察する。¹ 併せて、各学習書の著作者の問題にも考察を加

¹ 筆者は、中国初の英語語彙集である『啖咕喇国訳語』（18世紀中葉）の編纂者と編纂過程を考察した拙論(2021)において、福沢諭吉編訳『増訂華英通語』を不注意にも“日本で出版された最初の英語学習書”と説明し、その拙論を改訂して拙著(2023)に収めた際にもその誤りに気付くことがなかった。しかし、「英語」の語史を論じた拙論(2018b)では、『増訂華英通語』より早く出版された『英米対話捷徑』『和英商賈対話集』『商用通語』『ゑんざりしことば』などの英語学習書に触れており、その後2～3年のうちにそれらの存在を忘れたことになる。本小論は、拙論(2021)以来の上記の誤りについて

える。4点のうち『商用通語』は内容が質、量ともに劣り、かつ、依拠資料に関して『ゑんぎりしことば』に共通する要素があるので、『ゑんぎりしことば』の後で取り上げる。

加えて、稿末の附論において、『増訂華英通語』に続く時期に出版された石橋政方『英語箋』(1861(万延2)年)の依拠資料の問題について簡単に述べる。

2 中浜万次郎訳『英米対話捷徑』(1859年)

『英米対話捷徑』では、扉に「安政己未晩秋」という出版年月が書かれている。安政己未年は安政6年、「晩秋」は辞書によれば旧暦9月であり、「安政己未晩秋」は西暦の1859年10月にほぼ相当する。

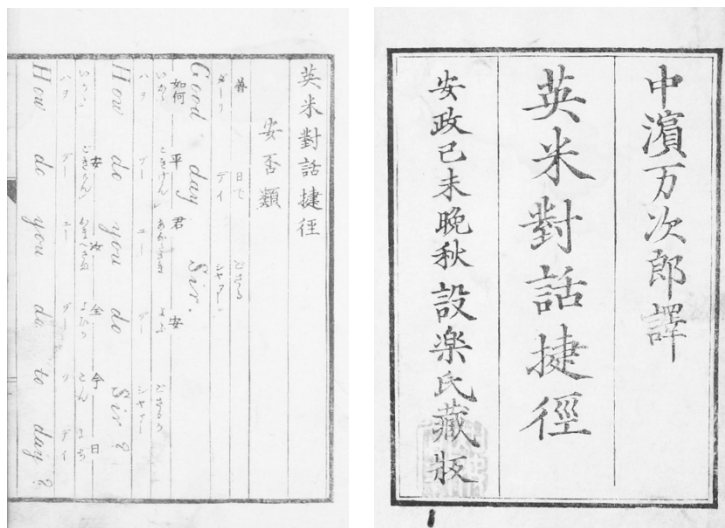


図1 中浜万次郎訳『英米対話捷徑』(早稲田大学図書館蔵)

調査は早稲田大学図書館蔵本による。²

2.1 『英米対話捷徑』の概要

扉に「中浜万次郎訳」という形で著作者名が表示されている。序文の類はない。日本で教育を受けなかった中浜にそれを書く能力がなかったことにおそらく関係しているのであろう。

扉に続く葉数の付せられていない4葉に英字と数詞に関する説明が置かれ、その後に35葉から成る英語の会話文例集が続いている。文例の各語には片仮名による発音表記および平仮名と漢字による語釈が添えられている——語釈と言っても英単語との対応は不完全であり、誤りも随所にある——。語釈には漢文式の返り点を加えられている。文例は例えば次のように書かれ

確かめる過程で分かったこと、考えたことを述べるものである。

² 早稲田大学古典籍総合データベース (<https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>) で画像が公開されている。同大学蔵本の各所に見られる書き込みは紛らわしいので図1では消して示した。

ている。

カ Can	キ you	ク speak	エ English?
----------	----------	------------	---------------

(第 21 葉裏)

以後、葉の表裏は a、b で表し、例えば「第 21 葉裏」は「21b」のように書く。また、仮名、漢字の回転は特に必要のある場合を除いて省く。

2.2 『英米対話捷徑』の依拠資料

『英米対話捷徑』の依拠資料の問題について杉本(1985b)は次のように述べている。

本書は〈中浜万次郎訳〉とあるように翻訳書であるから、よった底本があり純粋な意味では日本人の手になると評価できぬところである。(中略) 底本的なものとしては、万次郎自身がアメリカからもたらした、“The Elementary Catechisms/English Grammar/Part II. Orthography”の一部を活用したことが判明する。

ここで「活用」と表現されてはいるが、確かめてみたところ、それは巻頭の英字に関わるごく短い解説に借用が認められるということに過ぎなかった。それ以外の部分には *The Elementary Catechisms: English Grammar* (1850 年)——英国で出版された問答形式の教養書シリーズの英文法編——は関わりを持たない。

『英米対話捷徑』の本体である会話文例集の文例は中浜が準備したと大多数の論者が考えてきた。いくつかの発言を時間の順に記せば、岡倉(1933)は、『英米対話捷徑』について「さすが多年米国に在住した人の手に成つただけあつて」「其の英文といひ其の発音の表はし方といひ、立派なもので」云々と述べ、当時の類書との関係において「一頭地を抜いたものであつた」と評している。吉田(1970)も、「万次郎は、実際にアメリカで生活し、その体験をもとにしてこの本を書」いたと述べている。大谷(1985)は、「中浜万次郎訳とあるが、原書に相当する会話書の存在は考え難い」とし、その判断の根拠を論じている。宮永(1991)も、「おそらく万次郎は、何か参考書を使って本書を編んだのではなく、記憶にある英文を思い出しながら草稿を作ったものであろう」としている。中浜万次郎の後裔である人物の著した中浜(1991)も、「初めの頁の右には、中浜万次郎訳と書いてある。訳とはいってもその原本が別にあるわけではなく、万次郎が作った英会話文に片仮名の発音と平仮名の訳文をつけたという意味である。」と断定している。『ジョン万次郎の英会話』と題された乾(2010)は、“会話文の選択も万次郎自身が行ったと思われる”とし、風や航海に関わる文例 2 件を挙げて、“このような英文は日常ではさほど必要性を感じられないかも知れないが、捕鯨船で世界の海を巡った万次郎には大切な日常表現だった、『英米対話捷徑』の編纂時期に万次郎は軍艦操練所教授の職にあつて英語や航海術を教えたので、船乗りが知っておくべき英語として必要と考えたのだろう”という解釈を述べている。しかし、『英米対話捷徑』の会話文例集は実のところ特定の底本に忠実に従って編まれている。

同書の文例はすべて、1797年にオランダで出版された英語学習書 George Ensell *A Grammar of the English Language* (オランダ語書名 *Engelsche Spraak-Kunst*) から取られている。同書は‘Familiar Phrases and Dialogues’ という標題 (オランダ語‘Gemeenzaame Spreekwyzen en Samenspraaken’) のもとに多数の文例を英蘭対訳の形で挙げている。そして、その最初の4つのセクションである‘Of inquiring after one’s health &c.’、‘Of the weather’、‘Of speaking’、‘Of coming, going, seeing and knowing’に挙げられた約210件の英語の文例が『英米対話捷徑』でそのまま使われている。各セクションの標題はそれぞれ「安否類」「時候類」「雑話類」「往来音信類」と訳されている。『英米対話捷徑』は、「中浜万次郎訳」という表示が示し、杉本も言う通り、翻訳書である。

「安否類」の冒頭の6件の文例を示せば次の通りである。英語の発音表記と語釈は省く。

Good day Sir.

How do you do Sir?

How do you do to day? (1a)

How does your Lady do?

I am very well.

I am exceeding well. (1b)

これらは図2に見るように、Ensellの英語学習書の‘Familiar Phrases and Dialogues’の英語の文例に完全に一致している。

<i>Of Inquiring after one's health &c.</i>	<i>Van naar iemands gezondheid te vraagen.</i>
Good day Sir.	<i>Goeden dag myn Heer.</i>
How do you do Sir?	<i>Hoe vaard gy myn Heer?</i>
How do you do to day?	<i>Hoe vaard gy van daag?</i>
How does your Lady do?	<i>Hoe vaard Mevrouw?</i>
I am very well.	<i>Ik ben heel wel.</i>
I am exceeding well.	<i>Ik ben uitermaaten wel.</i>

図2 Ensell *A Grammar of the English Language*

底本の文例は誤りがあっても訂正されることなくそのまま使われている。「安否類」から例を挙げれば次の通りである。下線はここでの付加による。

He is much better to day than he was yes terday. (7a)

He should take the air (or go a airing) every day. (10b)

第1の例における yesterday の語の不審な分割は、底本で当の文例が “He is much better to / day than he was yes / terday.” のように3行にわたって印刷され——図2に見る通り、蘭文と英文の併

記であるために行は短い——、yes の末尾に必要なハイフンが欠けた状態で印刷されているのをそのまま使ったことの結果である。第 2 の例の下線部は正しくは go for an airing である。

少なくとも規範的には文法的逸脱と言うべきであろう次のような文例も底本に書かれている通りである。

How does your Son and Daughter do? (3b)

How is your Father and Mother? (4a)

ほかに、底本では数件の疑問文が疑問符“?”を欠きピリオドで終わっているが、それも一切処置されていない。

誤りを訂正しない——と言うより、訂正できなかったのであろう——くらいであるから、表記の不統一もすべて引き継がれている。例えば、次は「雑話類」に挙げられた対話である。

Can you say your lesson without book?—I can t say my Lesson. (24b)

ここに見る lesson と Lesson という表記の区別は単に底本に従ったものである。先に挙げた文例にも Lady、Son などの例があったが、Ensell の英語学習書ではしばしば必要なく名詞の語頭に大文字が使われている——オランダ語の文例で名詞に大文字が使われていることが多く、その記法の影響であろう——。ただし、応答の文で can't とあるべきものが can t になっているのは『英米対話捷徑』で新たに生じた誤りである。

筆者の粗い確認で気付いた底本との実質的な差異、すなわち、単なる誤写の類ではない違いは「時候類」における次の文例に見られるものだけである。

It snows hard. (14b)

底本ではこの文例は “It snows apace.” である。しかし、この副詞の交替が生じた原因は不明である。可能性としては、原文への忠実の方針に反して apace を平易な hard に書き換えた、Ensell の英語学習書には異版があってそこでは hard と書かれており、『英米対話捷徑』の編集にはそれが使われたなどのことが考えられるが、いずれも想像の域を出ない。³

2.3 『英米対話捷徑』の著作者

『英米対話捷徑』は従来疑われることなく中浜万次郎の著作として扱われてきた。しかし、上述の通り、その英語の文例はすべて Ensell の英語学習書から取られたものであり、中浜が書いたものではない。

底本を選び、文例の借用の範囲を決め、各文例に発音表記と語釈を加えるという作業を行っ

³ 付言すれば、底本において当の文例の少し後には apace と hard をともに含む “It rains apace (or very hard.)” という文例がある。これは『英米対話捷徑』でそのまま使われている。

たのは日本人であろうが、中浜がそのうちのどの局面にどの程度関与したかは明らかではない。もし序文があればそうしたことを考える手がかりになったかも知れないが、それが無い。発音表記に米国英語の要素が見られるにしても、それだけのことに基づいて中浜の関与を確実に認定することはできない。日本人が米国人の発音を聞いて書いてもやはり同じようになり得るからである。『英米対話捷徑』の発音表記を直ちに中浜の英語知識の反映と見る一般的な考え——例えば、荒木(1931)、岡倉(1933)、豊田(1939)、高梨(1965, 1990)、吉田(1970)、惣郷(1976, 1983)、杉本(1985a)、田辺(1987)、中浜(1991)、斎藤(2001)、乾(2010)——はいささか短絡的に過ぎる。

発音表記が現に中浜の発音に基づいているとしても、筆記者はおそらく別人である。例えば、**what** という語の発音の表記は文例によって「ハタ」「ハツタ」「フハツタ」と一定しない。同様に、**it** の発音は「イタ」「イータ」「イエツタ」と書かれ、**speak** の発音は多く「スパーカ」、ときに「スペーク」などと書かれている。英語を知る人物が書けばもっと安定した表記になったであろう。『英米対話捷徑』の発音表記は英語に通じていない日本人による音声知覚の結果——そして、ときにそれが後の浄書や板刻の過程でさらに変形したもの——だと推定される。

また、語釈にはすでに触れた通り返り点が付されているが、漢文の知識を欠く中浜にそのようなことを行うことはできなかったであろう。

とすれば、中浜は出版に際して名を貸しただけという可能性さえ考え得るわけであるが、英字の説明の一環として次のように書かれていることは注目に値する。標題は綴りの誤りを含めてすべて原文の通りである。英字の読みは一部に字形の崩れがあるが、推定に基づいて訂正して引用する。

エイ シイン ヲフ スイ アベセ
A sing of the adc

エー ビー シー リー イー エフ チー エイチ アイ ゼイ ケー エル エン メ ノ ビー キウ アー エシ チー ユー フー タブリヨ エキシ アイ
a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x . I

キャンノーツタ セイ ザヤク エービーシー

cannot say that a b c . 彼国童兒ニ教ユルニ如此節ヲナシテ是ヲ復誦ナサシム

これとて単に英字の歌の紹介ということであれば情報源が米国人である可能性も考えられるが、英字が x で終わり、歌詞が “I cannot say that a b c.” で終わっているのは中浜が米国の学校で身に付けた知識の不正確によるものだと推定される。歌詞の内容だけで考えれば英字を最後まで唱えられなかったことを “I cannot say . . .” と言っているかのようでもあるが、英字の最後が x ではほかの句と韻を踏めず、また、歌詞が短すぎて旋律にも合わない。

Fuld(1995)の記述を手がかりとして確かめたところによれば、アルファベットの歌は最初 1824 年にドイツで発表され⁴、その後 1834 年に米国でそれを模倣して作られた英語版が ‘The Schoolmaster’ という合唱曲⁵の一部として発表された。合唱曲は教師と児童のやり取りの様子を

⁴ *Musikalischer Haus-Freund*, 1824 (Mainz: B. Schott’s Söhne, 1824 年) 所収。

⁵ *The Schoolmaster: A Favorite Glee for Three Voices, As Sung at the Salem Glee Club* (Boston: C. Bradlee, 1834 年)。

歌うもので、児童が教師の求めに応じて英字を唱えるくだりがある。当該箇所歌詞は次の通りである。原本では楽譜で示されている旋律の骨格を括弧内に階名で示す。

: A B C D E F G. H I J K L M N O P. :	((ドソソララソー ファファミミレドー) ×2)
: Q R S T U W V. :	(ソソファファミミレー×2)
X & Y & Z Oh dear me!	(ドソソララソー)
I cannot say my A B C.	(ファファミミレドー)

ここでは V と W の順序を言い誤ったことを受けて “I cannot say . . .” と歌っている。V を句末に配しているのは、それによって G、P、V、me、C と韻を踏ませるためである。⁶

それにしても、英字の歌にしても、歌詞中に 2 度出て来る a b c の発音は「エー ビー シー」とされ、他方、標題に含まれる ^(ママ)adc は「アベセ」と読まれている。⁷ 後者はオランダ語の知識を有し、英語を知らない書き手が付した読みであろう。また、文例中の don't と shan't は漏れなく don 't、shan 't と分離した形に書かれている。それもオランダ語知識の干渉の結果であろうから——オランダ語の't は定冠詞 het の縮約形であり、頻出語である——、底本の英文を書き写したのもオランダ語を知る人物であったことが分かる。⁸ さらに、数詞の解説に添えられた

彼ノ One thousand ^(ママ) eighth ^(ママ) hundred fifty nine of 1859 ハ即吾安政六己未歳ニ当ル

という一文における of もまたオランダ語の混入であろう——同語の of は英語の or に相当する接続詞である——。of には「オウ」という発音と「或」という語積が添えられている。読み上げに使われた英文には or と書かれており、その後浄書の段階で of に変更されたのであろう。⁹

と言うよりも、そのような個別的な事象以前に、そもそもオランダで出版された英語学習書

⁶ 『英米対話捷徑』に書かれた歌においても本来 ‘The Schoolmaster’ と同様の韻を踏んでいたことが ^{エル}「I ^{エン} ^メ ^ノ ^{ビー} m n o p」に付せられた早口気味の読みから分かる。ちなみに、ドイツ語の原歌も “hikl mnop (ファファミミ レドー)” と j の字を欠くなどの誤りを含み、“Hans ja nicht lerne das abc. (ファファミミ レドー)” (Hans doesn't learn the ABCs.) で締めくくられている。そして、各句末はやはり韻を踏んでいる。

⁷ 巻頭にある英字の解説の標題 ‘ABC of the lettr’ (原文ママ) では ABC は「エベセ」と読まれている。

⁸ 宮永(1991)は「万次郎が自ら筆記体で書いた原稿を板木屋が板木(中略)に彫って刷った」と述べているが、単なる想像であろう。

なお、don 't、shan 't のほかに、底本の but が búť、reputation が repúťation に変わっているところがあるのもオランダ語の影響かも知れない。しかし、そのように書かれた理由は不明である。

⁹ 類似の現象が文例中にも散見される。例えば、ある文例 (19b) に含まれる ^{ズイ}“he moon” は底本で the の t の印刷がかすれてよく見えないことに関係している。すなわち、底本を見て読み上げた人物は文脈から the と判断したが、英語を知らない書写者は he と受け止めたのであろう。また、別の文例 (34b) における ^{マスタ}“M . C .” —— ^シ“M .” は「敬語略字」と注記され、「さま」と訳してある——は底本では “Mr. C.” である。上付きの小字で印刷された r を書写者が無用のものと見て省いたのであろう。

が底本として選ばれているという事実が、『英米対話捷徑』の著作の背後におけるそのような人物の存在を強く示唆している。

中浜が英文の発音、解釈その他に関するインフォーマント、情報提供者としての役割を果たしたとしても——おそらくそれが扉に記された「中浜万次郎訳」の実質であろう——、『英米対話捷徑』を主導的に著作した人物は別にあったと考えられる。それが1人であったか複数人であったかは分からないが、文例集の「安否類」「時候類」「雑話類」「往来音信類」という標題も、中浜ではなく伝統的な形式の類別語彙集やそれに類する書籍に関する知識を有する人物による翻訳だったはずである。¹⁰

3 著者不明『和英商賈対話集』(1859年)

『和英商賈対話集』では、巻頭の凡例の末尾に「安政六巳未九月」と書かれている。『英米対話捷徑』の扉の記載と同じ年月である。しかし、英文扉には“December 1859”とあるので、『英米対話捷徑』より若干遅い出版であったとひとまず考えるのが穏当であろう。

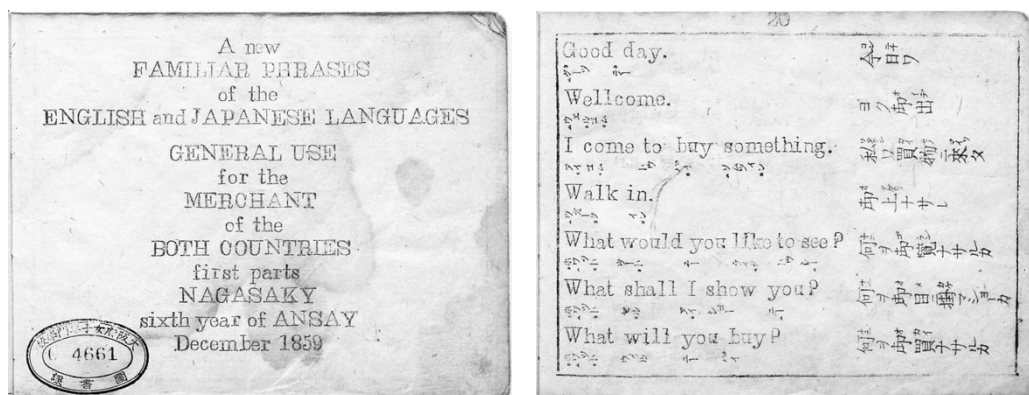


図3 著者不明『和英商賈対話集』(大阪公立大学中百舌鳥図書館蔵)

調査は大阪公立大学中百舌鳥図書館蔵本による。『和英商賈対話集』には日本語の扉がないので、図3には英文扉と本文の1頁を示した。書名は表紙の題簽に『和英商賈対話集』と書かれているだけである。¹¹「初編」とあるが続編の存在は知られていない。

¹⁰ 杉本(1985b)は、英文の発音表記に「オランダ語風の発音がみられる」とし、「協力者の中に蘭学者がいて、それを仲介にして表記したアメリカ英語の発音とも推測できよう」と述べている。第三者の関与の可能性に触れている点では私見に共通するが、杉本は『英米対話捷徑』を基本的に中浜自身の著作と考え、蘭学者の協力があつたと見ている。しかし、私見によれば、同書の主たる著者は中浜ではなくオランダ語の知識を有する別の人物である。その人物は発音表記だけに関与したのではなく、同書の構想から執筆までを担当している。そしてまた、その人物が特に蘭学者であつたと考え得る根拠があるわけでもない。

¹¹ 題簽は東洋文庫蔵本によって確認した。大阪公立大学蔵本では題簽が失われている。

3.1 『和英商賈對話集』の概要

巻頭の凡例で、同書が日英両国の交易従事者のために編まれた会話文例集であることが説明されている。すなわち、日本人のための英語学習書であると同時に、英国人のための日本語学習書としても使えるように作られている。著作者名はどこにも記されていない。

凡例に続いて英文扉があり、それに続く 3～19 頁に仮名や英字の簡単な説明がある。その後の 20～75 頁が約 270 件の文例から成る英和对訳の形の会話文例集である。同書では西洋の書籍と同じように見開きの片面ごとに算用数字によって頁番号が付せられている。

3.2 『和英商賈對話集』の依拠資料

図 3 の右側の画像にある文例を翻字して示せば次の通りである。以後、英語の発音の片仮名表記——仮名には発音の強弱を示すための記号が付せられている——と和文に添えられた振り仮名は特に必要のある場合以外は省く。

Good day.	今日ワ	
Wellcome.	ヨク御出	
I come to buy something.	^{ワタクシ} 私 ^{マイツ} ワ買物ニ来タ	
Walk in.	^{オアガリ} 御上ナサレ	
What would you like to see?	何ヲゴ覧ナサルカ	
What shall I show you?	何ヲ御目ニ掛マショーカ	
What will you buy?	何ヲ御買ナサルカ	(20)

第 3 の文例の come は文脈および対訳の和文との関係において came でなければならないが、この誤りが生じた原因については後に論じる。第 2 の文例の wellcome は現在の一般的な綴りと異なるが、過去の文献中には多く見出される。The Oxford English Dictionary 第 2 版 (1989 年) も well come を welcome の変異形と説明している。

『和英商賈對話集』にはおそらく依拠資料と呼べるような既存の英語学習書は存在せず、すべての内容が独自に準備されたものと考えられる。そう判断する根拠は、日本での交易の場面ならではのやり取りが非常に多いことにある。日英両国の日付、文字、長さの単位に関わる例を 1 件ずつ挙げる。

What is the day of the English month?—It is the fourteenth of april.—Then you can get it on the fourteenth day of october. ^{エグレス}啖咭喇^{イツカ}デワ幾日デ有マスカ——四月十四日デ有マス——夫デワ (商品は) ^{アナタ}貴君ノ十月十四日迄ニ出来マス (32)

Can you write the English letters?—No, I can not. I will request the interpreter to write it.—That will be done with Japanese letters. ^{エグレス}貴君ワ英吉利文字ヲ御書カ——イ、エ出来マセヌ ^(ママ)私ワ通詞方ニ頼^{ニッポン}デ書テモラ^{ヨロシ}イス——日本文字デ宜イ (38～39)

What length of the Japanese measure is equal to the English measure?^(ママ)—I don't now the Japanese measure.—Lend me the English measure. I will compare it with the Japanese measure. 1 yard makes 3 Japanese Shakf of timbers measure. ^{イチ}一ヤートワ日本尺^{ジャク}ノ何程^{イクラ}ニ当^{アタリ}マスカ
—私ワ日本ノ尺^{ブンジ}ヲ存^{ゾク}マセヌ—英吉利^{イギリス}ノ尺規^{サンギネ}ヲ御貸^{クラベ}ナサレ 日本ノ尺規ト比較^{クラベ}テ見マ
ショー 一ヤートワ日本ノ曲尺^{カネジャク}デ三尺ニ当マス (53~54)

このような文例の存在は、それら以外の文例が出典を持たないことを保証するわけではない。しかし、『和英商賈対話集』の文例は全体に自然な会話の展開を意識して構成されており、自作の文例と既存の英語学習書から取った文例の混合によって編まれたものではないと考えられる。

3.3 『和英商賈対話集』の著作者

『和英商賈対話集』には著者名が記されていないが、古賀(1947)は、同書を日本における活字印刷術の普及への貢献者として知られる蘭通詞本木昌造¹²の著述だとする推定を述べている。そして、以後の研究ではその推定がしばしば肯定的に受け止められている——例えば、渡辺(1964)、惣郷(1975)、大谷(1985)、杉本(1989)、小野沢(2004)、松田(2019)¹³——。しかし、本木が『和英商賈対話集』の印刷、出版に関与したとする古賀の考証が正しいとしても、それは同人が著者であったことの証拠にはならない。同書の文例は、日英間の取引の場面——特に、蠟や反物の売買——で必要とされる表現に通じていて初めて作れる性質のものである。しかし、本木がその条件を満たしていたことを示す事実は確認することができない。

古賀の思考は『和英商賈対話集』の著者が単数だとする暗黙の前提に基づいている。しかし、筆者の見るところによれば、同書には複数の著者がある。すなわち、『和英商賈対話集』の会話文例集は、日本人との取引に従事する英国人が英語の文例を書き、それに日本人が翻訳と発音表記を付け加えるという方法によって編まれている。

英語の文例が英国人によって書かれたことはいくつかの事実によって確かめることができる。その3点を挙げれば、第1に、日本語のローマ字表記に特徴的な要素が見られる。先に挙げた英語の文例中にも含まれていた長さの単位の「尺」は Shakf と書かれているが、その kf は母音の無声化したクを表す表記であろう。後に挙げる文例に出て来る「寸」は Sün と書かれているが、それは Sun と書いて英国人に誤読されるのを防ぐためだと考えられる。¹⁴ いずれも日本人

¹² 本木の活字印刷術への貢献については、早くは横井(1898)や北野(1911)に記述が見られる。

¹³ 渡辺、惣郷、大谷、杉本、松田は同書を本木昌造の著作として扱い、小野沢も「著者は本木昌造であると考えてよさそうである」と述べている。ほかにも、古賀の推定を肯定はしないものの疑うこともなく紹介しているという研究は多い(例えば、松村(1970)、原口(1992)など)。筆者自身も、拙論(2018b)およびそれを改訂して収めた拙著(2023)において、そうした半ば通説化した見解を不用意にも信用して『和英商賈対話集』を本木の著作として扱った。

¹⁴ 巻頭の仮名の説明において、日本語の5母音は「ア ä」「イ e」「ウ ü」「エ a」「オ o」のように口

が書くはずのない綴りである。

第 2 に、英国人が商品に関する各種の不满を述べる言い回し——反物を見ての“地合いが薄い／厚い／悪い”、“色が薄い／悪い”、“疵がある”、“破れている”、“染みがある”など——や、「上納」、*duty*——現代の消費税に類するものであろう——の負担を売り手に求める言い回しが紹介されているのは英国人の関心によるものと言える。その一方で、日本人の売り手が商品を売り込むのに使える表現はほとんどない。無論上に挙げた種類の表現も英国人との交易に携わる日本人が理解できる必要があったので、そうした文例を日本人が作った可能性があり得ないわけではないが、少なくとも次のような文例は英国人が作ったとほぼ確実に言うことができる。日本の長さの単位は名称が同じでも異なる長さを表すことがあるということに関するやり取りにおける英国人の発話である。

I have heard, there are many kinds of Le. ^リ 里ニモ色々^{アリ}有マスツーナ (61)

第 3 に、次の対話においては、英文のほうは話の流れが自然であるが、和文のほうはやり取りがかみ合っていない。

Will you have a ^(ママ)glas of wine?—No, thank you.—Why don't you drink? ^{アゲ}酒ヲ上マシヨ
カ——^{アリガト}難有——^{オアガリ}何故ニ御上ナサラスカ (47)

これは、英文が先に作られ、それを翻訳した日本人が“No, thank you.”という言い回しを知らなかったために誤訳を生じたということであろう。

そして、次のような例は『和英商賈対話集』の著述に複数の日本人が関わったことを示唆している。

How is timbermeasure ^(ママ)used?—Carpenters and ^{メチニース}mechanics use it. 曲尺ワ何^{モチイ}ニ用マスカ——
大工其外ノ職人ワ曲尺ヲ用マス (56)

ここでは *mechanics* とあるべき語が誤って *mechanies* と書かれ、発音も「メチニース」とされ

一マ字化されている。英国人が英語の正書法に誘導されることなく正しく読めるようそうした表記が考案されたものと考えられる。もっとも、その規定は厳守されておらず、本文で触れた *Shakf* は *Shākŋ* (ないし *Shākū*) と書かれていないし、ほかにも「間」は *Ken*、「丈」は *Djau* と書かれている。

ちなみに、巻頭の仮名と英字の説明の後に一見正体のはっきりしない類似の説明が 11 頁にわたって続いている。英字の説明に続き、形式上もそれに一致しているが、おそらくこれは粗く言えば日本語の音節の一覧のようなものである。「ba バ」「be ベ」「bee ビ」「bo ボ」「bu ビュ」に始まるおおむね“子音字(の連続)＋母音字”の形をした $30 \times 5 = 150$ 種類の綴りのリストになっている。しかし、仮名の説明に書かれたローマ字表記に一致しないばかりか、「bva ブワ」「gwee グィ」「lwo ルォ」のように本来不要の音節まで含んでいるなど、不審の点が多い。日本語の音韻を正確に把握していない英国人が試作した音節表といった性質のものであろう。

ている。しかし、和文のほうでは正しい *mechanics* に対応した「(其外ノ) 職人」になっている。翻訳と発音表記は分業によって行われたと考えられる——おそらく翻訳の後で浄書と発音表記の付加が行われたのであろう——。同様の例がほかにもいくつかあり、その2件を挙げる。

What are the fractions of the Shakf?—One tenth of Shakf is 1 Sün. One tenth of Sün is 1 Bü. One tenth of Bü is 1 Len.—Are ^{デール} there the same in both timber and stuff measures?—Yes. 尺ノ下ワ何ト言マスカ——尺ノ十分一ヲ一寸ト言マス 寸ノ十分一ヲ一歩ト言マス 歩ノ十分一ヲ一厘ト言マス——^{ソレ}去ワ曲尺モ ^{クジラジャク}鯨 ^{オナジ}尺モ ^{アリ}同事デ有マスカ——ヘイ (58~59)

As I will try to ^{テイキ} take it, you take my goods. (売価について) ^{ナルダケ}成丈 ^{ワタクシ}勘弁シマショウーカラ私ノ品ヲ御買下サレ (72~73)

最初の例に含まれる *there* は *these* でなければならないが、それが *there* と書かれ、発音も「デール」と表記されている。しかし、和文では正しい *these* に対応した「夫」になっている。第2の例の最初の *take* も、英国人の書いた英文では「勘弁する」、すなわち、「考慮する」を表す *think* であつたと考えられる——実際、先行する文例においても “Then, I will think again.” が「夫デワ私モ 勘弁シテ見マショウー」と訳されている——。

以上のような諸々の状況から、『和英商賈対話集』の文例集は、まず英国人が英語の文例を書き、それに相異なる日本人が翻訳の和文と発音表記を加えるという方法によって編まれたと推定される。先に見た次の例においても、*come* と書かれ、「コム」と読まれている。

I ^{コム} come to buy something. 私ワ買物ニ来タ ^{マイツ} (20)

これは英文としては問題ないが、商店にやって来た客の発話であり、しかも、「来タ」と訳されていることから考えて、英国人の書いた英文は *came* だったはずである。¹⁵

『和英商賈対話集』全体を通じて見れば状況は複雑で、ここでは議論を省いた要素もあるが、ともあれ重要なのはその著者の問題は文例の綿密な観察に基づいて総合的に考察する必要があるということである。私見によれば、同書は少なくとも1人の英国人と少なくとも2人の日本人の共同作業によって著された。本木昌造がその作業に関与したかどうか、そして、関与したとすれば作業のどの側面に関してであつたかは確かめるすべがないが、少なくとも『和英商賈対話集』が本木個人の著作である可能性はあり得ないと言ってよい。

4 清水卯三郎『ゑんぎりしことば』(1860年)

『ゑんぎりしことば』においては、序文末に「まんえむかのへさるのとしうづき」、すなわち、

¹⁵ 英文に翻訳の和文と発音表記が別個に与えられ、本文で見たような齟齬を生じた過程についてはいくつかの可能性を想像することができるが、事実は特定しがたい。なお、『和英商賈対話集』は英文とその発音表記が活字版、翻訳の和文が木版で刷られている(天理図書館編(1951)、桜井(1989))。

万延庚申年卯月と書かれている。万延庚申年は万延1年、1860年である。福沢諭吉編訳『増訂華英通語』では巻頭の凡例の末尾に「万延元年庚申仲秋」と書かれているので、『ゑんぎりしことば』のほうが数か月早く出版されたと考えてよいであろう。

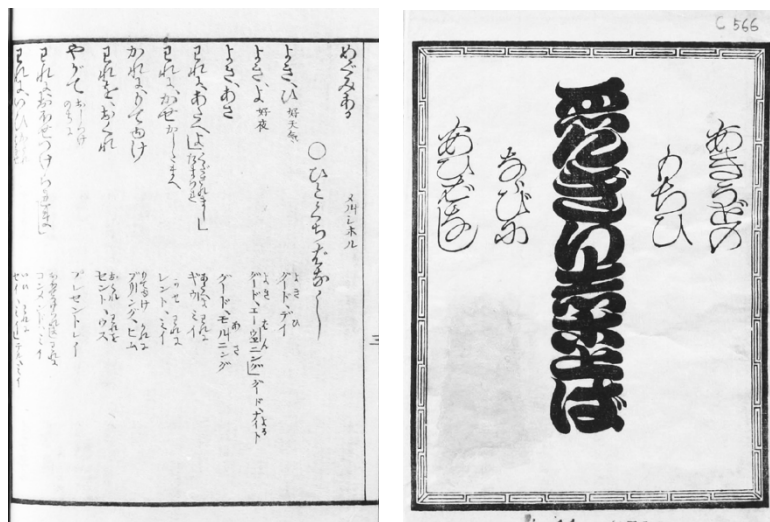


図4 清水卯三郎『ゑんぎりしことば』(早稲田大学図書館蔵)

調査は早稲田大学図書館蔵本による。¹⁶

4.1 『ゑんぎりしことば』の概要

巻頭に「しみづなほまる」なる人物による序文がある。その名は他所には見出せないが、渡辺(1925)の記述などから判断して、それを清水卯三郎とする通説に従ってよいであろう。

『ゑんぎりしことば』は、『英米対話捷徑』と同じく、日本人のために編まれた英語学習書である。そして、序文で説明されている通り、『和英商賈対話集』と同じく、交易の場面での英語の学習書である。扉に大書された書名の両脇には「あきうどのもちひ」「ならびにあひばなし」と記されている。¹⁷

生涯にわたって種々の方面で才能を発揮した清水卯三郎¹⁸は仮名文字論者でもあり、『ゑんぎりしことば』は和文、英文ともにほぼすべて仮名を用いて書かれている。ただし、「七曜日」(週)「日曜日」、「一番」「二番」、「みせが、二三げん、ある」のような主として数に関わる項目、「いしや 医くすし」「いしや 石工」「みやのごとき、いへなり」のような小字の注釈、「パウンド 百二十匁」[「\$^{ドル}元 の印 即ち洋銀なり」]のような解説には漢字も使われている。仮名だけでは日本

¹⁶ 早稲田大学古典籍総合データベースで画像が公開されている。

¹⁷ 「もちひ」は一般的な言い回しではないが、“使用語”のような意味を和語で表現したものではないかと想像される。「あひばなし」は「会話」を和語化したものであろう。

¹⁸ 同人の事跡については井上(1925)など多くの記述がある。自伝も長井(1984)として翻刻出版されている。

とかげ	リッザルド	
ひきがいる	フロック	
かいる	トアド	
かたつむり	スネイル	
くも	スパイドル	
あり	エント」イムメッド」ピスマイル	(上の巻 21a)

これは、図 5 に見るように、*Gemeenzame Leerwijs* の語彙集の‘Reptiles and insects, etc.’ (爬虫類、昆虫など) の開始部分に挙げられた英単語に完全に一致する。

Kruipende en gekorvene Diertjes, enz.	<i>Rep'tiles and Insects, etc.</i>
<i>Eene slang.</i>	A ser'pent, a snake.
<i>Eene adder.</i>	A viper, an adder.
<i>Eene hagedis.</i>	A li'zard.
<i>Een kikvorsch.</i>	A frog.
<i>Eene padde.</i>	A toad.
<i>Eene slak.</i>	A snail.
<i>Eene spin.</i>	A spider.
<i>Eene mier.</i>	An ant, an emmet, a pismire.

図5 Schuld Van der Pijl's *Gemeenzame Leerwijs*

一部の語句は van der Pijl の原著にはないので——具体的には、a snake、an emmet、a pismire の 3 つ——、Schuld による増訂版が底本とされたことが分かる。

ただし、語彙集全体を見ると、底本に挙げられた語が省かれているところもあれば、底本との関係がそもそも不透明であるところもある。この問題については渡辺・川端(1962a)に若干の議論がある。しかし、『ゑんざりしことば』の語彙集と底本の語彙集の対応関係の詳細に筆者は関心を覚えないので、確認は省く。

次に、『ゑんざりしことば』の会話文例集については、3 つの部分に分けて考える必要がある。

文例集の前半、具体的には①～⑭ (巻の下 3b～14a) では、竹村が指摘する通り、*Gemeenzame Leerwijs* の文例集のうち‘Familiar Phrases’ (オランダ語‘Gemeenzaame Spreekwyzen’) の 1 から 14 までのセクションの英文がほぼそのまま使われている。図 4 の左側の画像は①の開始部分であるが、最初の数件の文例に関して底本との対応を示せば次の通りである。英文以外の要素は省いて引用する。

<i>Gemeenzame Leerwijs</i>	『ゑんざりしことば』
Good day.	グード、デイ
Good evening, good night.	グード、エーウェニング」グード、ナイト

Good morning.	グード、モルニング	
Give me.	ギウ、ミイ	
Lend me.	レント、ミイ	
Bring him.	ブリング、ヒム	(巻の下 3b)

文例集の最後の㉓(巻の下 22b~26a)については、*Gemeenzame Leerwijis* の文例集のうち‘Dialogue VI’ (オランダ語‘Zesde Zamenspraak’) が一部改変のうえ使われていることが渡辺・川端(1962a)によって指摘されている。ただし、少数の文例は独自の追加によっている。

文例集の底本として使われた *Gemeenzame Leerwijis* は Schuld による増訂版のうち第5版よりも新しい版である。例えば、

なんぢの、としは、いくつ、なるや ホワット、エーヂ、アール、ユウ (9a)

という例の英文は、第5版までの“*How old are you?*”ではなく、第9版、第10版の“*What age are you?*”に一致する。第6版から第9版までのいずれかの版の段階で表現が変更されたことになる——筆者は第6版から第8版までの版は未見である——。

文例集の残りの部分、すなわち、㉕~㉗(巻の下 14b~22b)——以後、「中間部」とする——については竹村も渡辺・川端も意見を示していないが——竹村は 14b の文例については「長崎版から採つたらしい後が見える」ことを指摘している——、当該の範囲の文例は見かけ上は前後の範囲と変わりがないものの、その多くが著者によって独自に準備されたものと筆者は推定する。

そう言える最大の理由は、中間部の文例には英語として不適格な表現が多く見られることにある。その前後の範囲の文例にも活用の誤りや現代の目で見ると気になる点はあるが、中間部にはいっそう目立つ誤りが非常に多い。まず、㉕の最初の対話の例を挙げれば次の通りである。括弧内の英字による英文は筆者の推定による追加である。以後、葉数はすべて「巻の下」のものである。

なんぢ、みずか、または、ちやを、のむか——われは、ゆを、このむ
 ギリンク、ユ、ヅェ、ラーゾル、オル、テー (*Drink you the water or tea?*) ——アイ、ウ
 イル、ヅェ、ボイレッド、ラーゾル (*I will the boiled water.*) (14b)

それ以後の範囲に見られる誤った英文の中から数件を選んで示す。

われは、おほくは、のみぬ
 アイ、ノット、ギリンク、ツー、モッチ (*I not drink too much.*) (15a)
 いかなる、やくそく、なるぞ

- ホワット、イス、ツ、プロミッスド (What is to promised?) (16b)
 われ、なんぢに、あづけんと、おもふ
 アイ、ウィル、キープ、ユウ (I will keep you.) (16b)
 それを、われに、かへされよ
 ギウ、ミイ、ベック、イット (Give me back it.) (16b)
 まちがふこと、なかれ
 ミステーキ、ノット (Mistake not.) (18b)

内容上日本に関わる文例もある。その一部を次に示す。

- われ、なんぢに、にほんの、さんぶつ、きぬ、つくりなしたるきぬ、をりたるきぬといふところ あぶら、あ
 らがね、こんぶ、ならびに、あるほかのものを、うらんと、おもふ
 アイ、ウィル、セル、ユウ、ジャッパネス、プロヂュール、ラウセルク、マニユファ
 クチュールドセルク、オアイル、コッペル、シーウィート、エーン、エニ、オーブル (I
 will sell you Japanese produce, raw silk, manufactured silk, oil, copper, sea weed, and any
 other.) (17b)
 われ、いま、五十斤より、おほくは、うることならぬ、なぜなれば、ほかの五十斤は、わ
 れ、いまだ、エドより、ヨコハマに、うけとらぬ
 アイ、ケン、ノット、セル、モーレ、ゼン、フィフティ、ホンデルト、ケッチイ」フ
 ォル、オブル、フィフティ、ピッコル、アイ、ハフ、ノット、リシウド、イエト、フ
 ロム、エド、イント、ヨコハマ (I can not sell more than fifty hundred catty, for other fifty picul
 I have not received yet from Yedo into Yokohama.)²⁰ (18a)

これらにも英語表現としての問題が若干ある。

4.3 『ゑんぎりしことば』の著作者

清水は巻頭の序文で次のように述べている。句読点を調整して引用する。

こはわがつたなきふてなれば、あやまりもおほからん。さながらにはのあしにいせのは
 まをぎてふためしあれば²¹、おのかおぼえしこととたがふとて、いみなじることなかれ。

上で見た通り、『ゑんぎりしことば』の編集には *Gemeenzame Leerwijs* の増訂版が使われているが、そこから引用された語彙、文例以外の要素は清水自身によって準備されたと考えられる。

²⁰ catty と picul は西洋人が東南アジアの植民地から中国、そして、日本に持ち込んだ重量単位。

²¹ 「難波の蘆は伊勢の浜荻」は「物の呼び名や風俗・習慣は所によって違うことのたとえ」(『日本国語大辞典』第2版第10巻、小学館、2001年)。

確かめてはいないが、『ゑんぎりしことば』の 2~3 割に過ぎないという印象である。内容の質の面でも、前節までに考察した 3 点の英語学習書に比べて全体に水準が劣る。

5.2 『商用通語』の依拠資料

『商用通語』の依拠資料に関する議論は筆者の確認の範囲には存在しない。

同書の語彙集の編集には、相当数の項目に関して、仏英蘭 3 言語の類別語彙集である村上英俊『三語便覧』(1854 (嘉永 7) 年序) が使われている。項目の総数が大幅に減り、排列も完全に変わり、形式が変更され、しばしば内容も改変されているので、見かけ上はそのことが分かりにくい、単に一致ないし類似するだけでなく借用の関係を確実に読み取れる項目が多数ある。次にその 3 例を挙げる。

禁^(マツ)ずる ツ、ホーア、ビット / ヘルヒーデー (7b)

考^{かんがへ}る ツ、メジテート / ペインセン (14a)

あく^(マツ)ひする ツ、ページ / ゲーユ、ウェン (24a)

これらのもとになっていると見られる『三語便覧』の項目は次の通りである——フランス語は省く——。同書は初巻、中巻、終巻の 3 巻より成る。振り仮名はすべて原文の通りである。

禁^{キンブル} to for^トbid / verb^{ヘルビーデー}ieden (終巻 55b)

沈^{カンガヒル}思 to med^トitate / pe^{ペインセン}inzen (終巻 57b)

欠^{アタビル} to ga^トp / gee^{ゲーユウェン}uwen (終巻 39b)

第 1 の例においては、底本の「ヘルビーデーデン」における余剰の長音符号が引き継がれ、印刷の薄い「ン」が消えている。第 2 の例を『商用通語』で見たときには「考える」を「メジテート」、すなわち、meditate と訳す理由が分からず不審に思ったが、底本での見出し語は「沈思」をそう読ませたものであった。第 3 の例では英語の gape (あくびをする) が誤読によって「ページ」に変わっている。

会話文例集は、『ゑんぎりしことば』と同じく、一部に *Gemeenzame Leerwijs* の文例を利用し、それに独自の文例を追加することによって編まれている。

Gemeenzame Leerwijs から取られた文例には例えば次のようなものがある。

夫を御疑ひ被成な

ヅー、ノット、ドブト、イット / トエーヘル、エル、ニート、アーン (2b)

御好み次第の色を御撰み被成べし

チウジ、コロワー、ユー、ライキ、ベスト / キース、コレウル、ユー、ヘット、ベスト、アーン、スタアンデ (4a)

これらは底本の“*Twijfel er niet aan. / Do not doubt it.*”、“*Kiss de kleur, die u het best aanstaat. / Choose the colour you like best.*”という文例にほぼ一致している。ただし、*Gemeenzame Leerwijs*に基づく文例は少ないこともあって、そのどの版が使われたかを確実に知ることはできない。

著者の追加によると思われる文例には次のように破格の英文がいくつもある——筆者が正否を判断できない蘭文は省く——。推定による英文を括弧内に示す。

気にいらぬ ノーライキ (No like.) (7a)

めかたあらためる
量秤改 イト、イシ、スチル、ワンス、ツ、ウェー (It is still once to weigh.) (14a)

私は正直 アイ、ライト (I right.) (14b)

今日より十日目に ネキス、テンデイ (Next ten day.) (16b)

横浜の地名を含む次のような文例もある。「港崎町」は横浜開港に伴う都市建設の一環として1859(安政6)年に設けられた遊廓であり(横浜市役所(1932))²⁴、英文では「ムスメ ハウス」と訳されている。この文例は和文と英文だけで、蘭文は示されていない。

あなたは港崎町へ²⁵御出被成で御座らふ 私も御同道致します

ユー、サル、ゴー、ムスメ、ハウス アイ、ゴー、ウィッジ、ユー (You shall go *musume* house. I go with you.) (21b)

この文例に続けて4葉を費やして挙げられている語彙は「遊廓類」と名付け得る一群を成している。日本語だけを記せば、「踊子」「遊女」「芸者」「酒」「茶」「魚」「食ふ」「味よき」「酩酊」「下戸」「かき面」「美しき」「口吸ふ」「かわいがる寵愛」「ねふたい睡眠」「ねとこ寝所」「枕」「手燭」などのごとくである。その項目の過半数がやはり『三語便覧』から取られている。著者は、同書の各所から、交易相手の西洋人を遊廓に案内したときに必要となりそうな語句を探し出し、不足の表現を独自に補ったのであろう。

5.3 『商用通語』の著作者

小島雄齋なる人物は、おびただしい数の記述や研究のある中浜万次郎、本木昌造、清水卯三郎の3人とは対照的に、その素性がまったく知られていないようである。『商用通語』の作者と説明する記述を超える情報はどこにも見出すことができない。「小島雄齋」が実在の人物の実名であるかどうか不明である。扉で「小島雄齋先生」と敬称を添えて書かれていることからすれば実在の人物のようでもあるが、確かなことは言えない。

²⁴ 幕府が定めた地名は「みよざき港崎町」であったが、コウザキと呼ばれるようになった(横浜貿易新報社編(1909)の「花街柳巷」に収められた「天保老人某談」)。

²⁵ 実際には「へ遊窟^へ」のように書かれている。ほかの文例との関係も考慮して、大きめの読点に見えるものを「へ」と解釈した。『商用通語』には仮名、漢字ともに独特の字形が多い。

しかし、同書の「酒仙堂主人」による序文で“雄齋が既存の語学書に誤りの多いことを憂えて英米蘭 3 言語を日本語に訳して疑惑や不平を無からしめた”と説明されており²⁶、それを疑うべき理由もないので、差し当たり同人が同書を編んだと考えてよいであろう。それにしても、小島雄齋の人物像に関して今『商用通語』の観察を通じて推定し得るのは、おそらく横浜で西洋人との交易に従事し、英語とオランダ語をある程度操ることができ、「先生」と呼ばれることがあったということだけである。

本文の開始部分には「小島雄齋訳」と書かれている——ここには敬称がないのは、本人が書いたということか——。 *Gemeenzame Leerwijs* から取られた少数の文例に関しては実際英語とオランダ語を日本語に訳していると言えるが、それ以外の文例およびすべての語彙——『三語便覧』から取られたものと追加されたもの——については事情が異なっている。同書の全体にわたって信頼できる英蘭の典拠があるかのように装う目的で「訳」と書いたということかも知れない。

序文の説明に言う“既存の語学書”は『三語便覧』のことであろう。早稲田大学蔵本の裏表紙の裏には、著者の執筆によると思しき、序文と同旨の説明を記した紙片が貼られている。確かに、『商用通語』には『三語便覧』の記述を改善しているところがある。例えば、先に挙げた例にあった「考える」を表す「ツ、メジテート」は底本の「^トto ^{メヂタテ}meditate」の発音表記を修正したものであり、もう 1 例を挙げれば「飯」を表す「ボイルト、ライシ」（22b）は底本にフランス語式の語順で書かれた「^{リセ}rice ^{ボイルド}boiled」（初巻 50b）を訂正したものである。しかし、『三語便覧』の誤りが継承されたり、項目がむしろ劣化した形で再現されたりしているところも非常に多く、同書を改善して疑惑や不平を無からしめるという意図が満足に達成されているとは言えない。ちなみに、序文と本文で意味もなく英米蘭の 3 言語と説明しているのは、『三語便覧』への対抗意識によるものだったのではないかと想像される。

6 おわりに

幕末の初期英語学習書のうち中浜万次郎訳『英米対話捷徑』、著者不明『和英商賈対話集』、小島雄齋輯『商用通語』、清水卯三郎『ゑんぎりしことば』の 4 点を主たる対象とし、それぞれの依拠資料と著作者の問題に関する私見を述べた。各学習書に関するやや粗い考察の結果であり、その補訂は今後の研究に委ねたい。

従来この方面の研究においては、思考が思い込み、通説の軽信、皮相な観察、短絡的な判断などに基づく浅い次元にとどまりがちであった。²⁷ しかし、学習書の満足な理解のためには、

²⁶ 序文は漢文で書かれており、本文で“語学書”として引用した箇所原文は「通訳各国之語之書」である。おそらく「通訳」は“翻訳”、「語」は“言語”の意で、“各国の言語（の表現）を（日本語に）訳した書”ということではないと思われる。

²⁷ 『英米対話捷徑』の扉に「中浜万次郎訳」と書かれているにもかかわらず中浜が自ら英語の文例を

暗黙の前提を捨て、綿密な観察に基づいて総合的に考察することが必要である。文例を見てこの英文は立派だ、誤っている、翻訳が正しくないなどと論評したり、英語の発音表記に含まれる米語的、オランダ語的な要素や標準からの逸脱を指摘したりといった素朴な議論を超えたところに、洞察を要する事実は潜み、解明を待っている。

附論 石橋政方『英語箋』(1861年)

福沢諭吉編訳『増訂華英通語』にやや遅れて出版された英語学習書の1つに石橋政方『英語箋』(1861(万延2)年)がある。2巻より成り、「巻之一」は語彙集、「巻之二」は語彙集と会話文例集である。文例集——目録では「日用語法」と題されている——は「会話一」と「会話二」の2つの部分に分かれている。

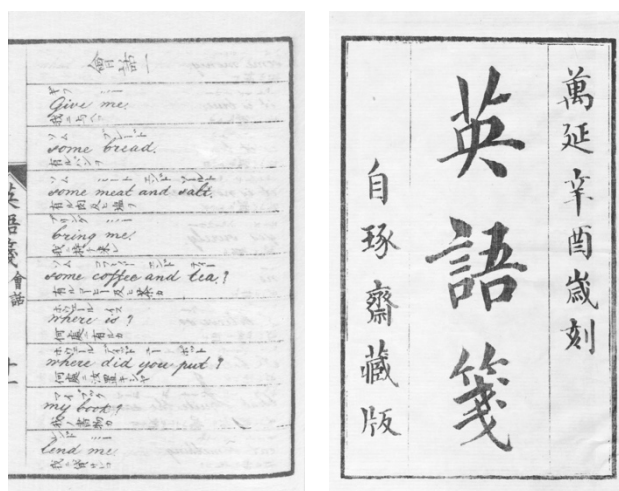


図7 石橋政方『英語箋』(国文学研究資料館蔵)

新村(1922)は、同書について「森島及び箕作の蛮語箋に基いたもので、その蘭語を英語にしかへた様なもの」と述べている。その説明は同書の語彙集が森島中良原著、箕作阮甫増補『改正増補蛮語箋』(1848(嘉永1)年)に基づいて編まれていることを正しく言い当てているが、会話文例集には通用しない。『改正増補蛮語箋』にも同じく「会話一」「会話二」と題された文例集があるが、『英語箋』のそれは内容がまったく異なっている。

渡辺(1962)は、“文例集は必ずしも *Gemeenzame Leerwijs* のそれに完全に一致はしないのだが、同書に拠ったと想像するのが最も確からしい線だと思ふ”とする。渡辺のその判断は『英語箋』

作ったと考え、『和英商賈對話集』は日本の活字印刷術の祖と呼ばれる本木昌造によって著されたという想像が示されれば安易にそれに従うといった姿勢は、過去の業績を証拠もなく有名人に帰し、そのような説を轻信する傾向の一例と言える。そして、それは陳(2011)が近代新語の考案者をめぐる議論に関して指摘する“名人造語説の流布”の現象に本質的に同等である。

の文例集が単一の資料に依拠しているとの前提に基づいている。

しかし、筆者の確認によれば、『英語箋』の文例集には実際は依拠資料が 2 件ある。すなわち、「会話二」は確かに *Gemeenzame Leerwijs* の英語の文例によっているが、「会話一」はオランダ人のための英語学習書 *D. Bomhoff Handleiding voor hen, die in korten tijd de Engelsche Taal willen leeren spreken en schrijven. Naar het oorspronkelijke van D. Wilke* (Wilke の原著に基づく英語速習書) (1835 年原刊) ——確認は 1857 年刊の第 6 版による——に収められた文例集を用いて編まれている。『英語箋』の文例集を全体として見れば *Gemeenzame Leerwijs* に一致する要素と一致しない要素とがあるのはそのことによる。

文献

- 荒木伊兵衛(1931)『日本英語学書志』(創元社)
- 乾隆(2010)『ジョン万次郎の英会話 『英米対話捷徑』復刻版・現代版』(Jリサーチ出版)
- 井上和雄(1925)「みづほ屋卯三郎(上)(中)(下)」『新旧時代』第1年第4冊～第6冊(福永書店)
- 大谷利彦(1985)「長崎版会話書考」『武蔵野英米文学』Vol. 17(武蔵野女子大学英文学会)
- 岡倉由三郎(1933)『岩波講座世界文学 日本人の欧文文学』(岩波書店)
- 小野沢隆(2004)『和英商賈対話集』解題と様相『浜松大学研究論集』第17巻第2号
- 北野孝治(1911)『長崎郷土誌』(長崎市小学校職員会)
- 古賀十二郎(1947)『徳川時代に於ける長崎の英語研究』(九州書房)
- 斎藤兆史(2001)『英語襲来と日本人—えげれす語事始—』(講談社)
- 桜井孝三(1989)「幕末における本木昌造の書物と活字(1)」『印刷雑誌』第72巻第1号(印刷学会出版部)
- 新村出(1922)「日英関係図書展観志(上)」『芸文』第13年第6号(京都文学会)
- 杉本つとむ(1985a)『日本英語文化史の研究』(八坂書房)
- 杉本つとむ(1985b)『日本英語文化史資料』(八坂書房)
- 杉本つとむ(1989)『西洋人の日本語発見—外国人の日本語研究史1549～1868—』(創拓社)
- 惣郷正明(1975)「夫婦本の再会—本木昌造百年記念講演会—」『日本古書通信』第40巻第10号(日本古書通信社)
- 惣郷正明(1976)「会話書の移り変わり」日本英学史学会編『英語事始』(エンサイクロペディアブリタニカ(ジャパン))
- 惣郷正明(1983)『英語学び事始め』(朝日イブニングニュース社)
- 高梨健吉(1965)『英学ことはじめ』(角川書店)
- 高梨健吉(1990)「英学史から見たジョン万次郎」川澄哲夫編『中浜万次郎集成』(雪書房)
- 竹村覚(1933)『日本英学發達史』(研究社)
- 田辺洋二(1987)「英語教育史に於ける発音の片仮名表記—中浜万次郎『英米対話捷徑』の表記を中心に—」『日本英語教育史研究』第2号(日本英語教育史研究会)
- 田野村忠温(2018a)「新出資料『華英通語』道光本と中国初期英語学習書の系譜—附論 福沢諭吉編訳『増訂華英通語』—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第58巻

- 田野村忠温(2018b)「言語名『英語』の確立」『東アジア文化交渉研究』第11号(関西大学大学院東アジア文化研究科)
- 田野村忠温(2021)「『啖咕咽国訳語』の編纂者と編纂過程—中国最初の英語辞典の分析—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第61巻
- 田野村忠温(2023)『英語東漸とその周辺』(和泉書院)
- 陳力衛(2011)「近代日本の漢語とその出自」『日本語学』第30巻第8号
- 天理図書館編(1951)『天理図書館稀書目録 和漢書之部 第二』(天理図書館)
- 豊田実(1939)『日本英学史の研究』(岩波書店)
- 長井五郎(1984)『焔の人・しみづうさぶらうの生涯』(さきたま出版会)
- 中浜博(1991)『私のジョン万次郎—子孫が明かす漂流150年目の真実—』(小学館)
- 原口裕(1992)「『和英商賈対話集』訳語索引」『女子大文学 国文篇』第43号(大阪女子大学国文学研究室)
- 松田清(2019)「洋学貴重資料にみる絵と言葉—江戸から明治へ—」『神田外語大学日本研究所紀要』第11号
- 松村明(1970)『洋学資料と近代日本語の研究』(東京堂出版)
- 宮永孝(1991)「〔付録〕『英米対話捷徑』について」エミリー・V・ウォリナー著、宮永孝解説・訳『ジョン万次郎漂流記—運命へ向けて船出する人—』(雄松堂出版)
- 横井時冬(1898)『日本工業史』(吉川半七)
- 横浜市役所(1932)『横浜市史稿 風俗編』(横浜市役所)
- 横浜貿易新報社編(1909)『横浜開港側面史』(横浜貿易新報社)
- 吉田常吉(1970)「ことばに生きた人々(16) ジョン・万次郎〈漂流のはての英会話〉」『ことばの宇宙』第2巻第8号(ラボ教育センター)
- 渡辺庫輔(1964)『崎陽論攷』(親和銀行済美会)
- 渡辺修二郎(1925)「清水卯三郎の事一二件」『新旧時代』第1年第5冊(福永書店)
- 渡辺実(1962)「【追14】大阪女子大学附属図書館編『大阪女子大学蔵日本英学資料解題』(大阪女子大学) [渡辺・川端(1962b)への追記]
- 渡辺実・川端善明(1962a)「[11] ゑんぎりしことば」大阪女子大学附属図書館編『大阪女子大学蔵日本英学資料解題』(大阪女子大学)
- 渡辺実・川端善明(1962b)「[14] 英語箋」大阪女子大学附属図書館編『大阪女子大学蔵日本英学資料解題』(大阪女子大学)
- Fuld, James J. (1995) *The Book of World-Famous Music: Classical, Popular and Folk*. Fourth Edition. New York: Dover Publications.
- Wilhelm, Frans A. (2005) *English in the Netherlands: A History of Foreign Language Teaching 1800-1920, With a Bibliography of Textbooks*. Utrecht: Gopher Publishers.